

ガーブの孫娘

猫ニャンニャンニャンニャンニャン…etc

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りの内容だけど主人公は転生者で前世の記憶は薄い。
海軍サイドでボチボチやってく予定。

ちなみにドラゴンの娘ではなく、ドラゴンに関係の薄い妹がいて、その娘っていう設定です。

胸糞？展開あり。

目次

3話	2話	1話
8	3	1

1話

物心付いた時に自覚したのだが、私には前世の記憶があるようだった。

断片的でブツ切りにされたようなものではあるものの、その記憶によれば、前世の私は日本という国で生活していたらしい。

らしい、と言うのはこの記憶は記録のようなもので、私が私として日本で生活していたと言う実感は薄い。

前世の私と今世の私は、別人として存在している。

例えるなら、他人の人生を本を読んで疑似体験したようなものだ。

この記憶は。

文字ではなく五感で体験していると言う点以外は概ねこの表現で間違いない。

と、仰々しく説明しているものの、この記憶の大部分に関しては私を早熟させるきっかけになった以上に大して意味はない。

赤ん坊の頃からこの記憶を持っている私からすれば、前世の記憶があるから何…?という感覚だ。

なにせ、断片的であると説明したように、前世の名前も性別も、家族構成や友人関係については何も思い出せないのだから。

これらがあつたら自身のアイデンティティや今世の両親との接し方に葛藤が生まれたのかも知れないが、ないのだから問題はない。

他に問題…と言うよりも重要な意味を締めている箇所は、前世の私がワンピースと言う漫画を読んでいて、その物語の大部分を記憶しているということだ。

ワンピース…それは海賊として主人公が仲間を集めてワンピースと呼ばれる秘宝を目指して成り上がっていく物語なのだが…世界観は割とカオスだ。

前世風に言えば、アメリカ軍並の軍事力を持った海賊だったり非合法組織が群雄割拠している世界。

サイボーグやらゾンビやら何でもありなところもカオスさに拍車をかけている。

まあ、本題にもどるが、何故この漫画の記憶が前世の記憶の中でも、とりわけ重要なのかというと。

それはこの私自身が存在している世界がワンピースの世界だからだ。

私の産まれた育った村はイーストブルーにあるゴア王国のライムギ村と言う場所だった。

ゴア王国はイーストブルーの中でも大きい国なのだが、問題はそこではない。

このカオスな世界で平穏に過ごしたいと言う願いを持つ私にとっての障害がこの国には存在するのだ。

ワンピースの主人公モンキー・D・ルフィ。

ここライムギ村から王宮、グレイ・ターミナル、コルボ山を挟んだ向こう側にあるフーシャ村に奴は存在しているはずだ。

ゴールド・ロジャーが処刑されてから22年経っていないことから奴は必ず居るはずだ。

私的に奴とは絶対に関わりたくない。

これから政府視点で世界を揺るがす大犯罪者になる男と親しくなつて私は平穏に過ごせるだろうか。

そう……。答えは否だ。

と、言うことで私のしばらくの人生の目標は絶対にルフィやその知り合い達と関わりを持たないことに、決まっていた。

しかし、不幸中の幸にもここライムギ村は事件が起こるグレイ・

ターミナルなんかからは王国の反対側で遠いし、作中では名前すら出てこない場所だ。

私の心配は杞憂に終わることだろう。

……と、思っていた時期が私にもありました。

2話

私が本を読んでいると、母親から声を掛けられた。

「アイシャ。今日はお父さん……じゃなくてお祖父ちゃんが久しぶりに来るんだって。だから夕飯はお祖父ちゃんも一緒に食べることになったからね」

「ふくん。分かった」

私ことアイシャは、本へ目を通してながら適当に返事をした。

ライムギ村で雑貨屋さんを営む我が家は村の中ではそれなりに裕福で、アイシャは時々店番をする以外はこうして暇をしているのだ。「お祖父ちゃん赤ん坊の頃のアイシャとしか会ったことないから凄く楽しみにしてたわよ。色々と豪快な人だけど失礼のないようにね」

「分かった」

話によれば、私の母方の祖父は海軍に所属している将校クラスのお偉いさんらしい。

普段はグランドラインで活躍しているらしくイーストブルーへは中々来れない。そして来てても他に用事があるため、ここライムギ村へはあまり立ち寄らないそうだ。

そして、これは裏の話なのだが、立ち寄らない理由はそれだけではなく、どうにもお父さんが祖父を毛嫌いしているそうで雰囲気が悪くなるからと、お母さんが祖父にどうか来ないでほしいと頼み込んでいるらしい。

え…？

なんで子供である私がそんな事を知っているのかって？

それは私の耳が生まれつきとても良いから、お母さんとお父さんが昨晚に話していることをこっそり聞いたからだ。

まあ、私のこれは耳がとても良いと言うよりは広い範囲に渡って物体や生き物の気配を感じ取れると言うか……。どう過小評価しても生まれ持ったの見聞色の覇気なのである。

しかも鳥のフンなどが脈絡もなく頭に落ちて来るときなんかは、未来が見えてしまうほど無駄に高いレベルの見聞色の覇気だ。

はつきり言ってこんなものは平穏な日常生活においては不便つちや不便なので普段は意識的に力を抑えて、何とか家全体を感じるくらいまでに行っている。

なにせ、この能力と来たら、両親やお隣の若夫婦の夜の営みを感じ取ったり、村の誰かへの悪口を聞いてしまったり。

さらには感情も読めるので私（6歳）を性的な目で見ている奴なんかも分かってしまうのだ。

たしかに私を見てくれは母親譲りで将来有望かも知れないが、流石に未成熟すぎると思う。

近所のおっさんの性癖なんぞ私は知りたくなかったぞ。

……まあ、話が逸れた。

とにかく何にしてもだ。

お父さんが毛嫌いするその海軍将校の祖父が原作キャラでもない限り私は何でも良かった。

いや、孫に何か色々と買い与えてくれる甘い人だったら良いな。

それと冒険する気など更々ないが、グランドラインの話も聞いてみたい。

と……アイシヤは何やかんや祖父が来るというのを多少は楽しみにしながら、家で本を読み続けた。

その人がその原作キャラだとも知らずに。

☆ ★ ☆ ★

アイシヤが呑気に本を読んでいると、その時は唐突にやってきた。見聞色で検知される今まで感じたこともないような力強い気配。

人知れず無意識に姿勢を正してしまうアイシヤ。

つ……強い……。

そうか……これが漫画やアニメで言う強いなのか……。

アイシヤの耳へこちらへ近づいて来る母と祖父の会話が耳に入る。

「ここへ来るのも久しぶりだな！ 4年ぶりくらいか！」

「全く……我が儘って自覚して大人しくしてねお父さん。それと絶対にドラゴンの話題は出さないで。あの人はドラゴンの親戚って周りに

知られるのがとても怖いみたいだから」

「言われなくとも分かつとるわい！ 全く！ ワシの娘を娶っておきながら小さいことを気にしおつて！」

「お父さん！ そんなこと言つて本当に分かつてるんでしようね！」

「お前もドラゴンは実の兄じやろうが！」

「そんな会つたこともない人を実の兄だなんて言われても…。ドラゴンは私からすればただの犯罪者よ」

は…？ ドラゴンの親戚？

お母さんがドラゴンの妹？

は？

アイシャの思考が固まる。

私の見聞色の覇気バグつてんのかな。

いや…そうに違いはない。

やがて、玄関に入ってきた二人の話題はアイシャのことへ移る。

「アイシャはどこなんじゃ！ 久しぶりに孫娘の顔くらい見させてくれ！」

「はいはい分かつてるわよ。アイシャならたしか居間で本を讀んでいたかしら」

「そうか！ 居間だな！」

ドカドカと足音が聞こえると、リビングの扉が開くのはあつという間だった。

「アイシャ！ 久しぶりじゃな！ ワシのこと覚えとるか！」

アイシャの記憶より若々しく、髪も白髪混じりの黒髪だったが、彼の名前は間違えようがなかった。

「ガープ!？」

思わず言葉に出してしまう。

「ぶわっはっはっはっは!! まだ赤ん坊だったんじゃが覚えていてくれたか！」

いや、覚えてねーよ！

アイシャには前世の記憶があるとはいえ、脳が未発達なせいか赤ん坊の頃の記憶は曖昧なのだ。

アイシヤが顔を引き攣らせていると、母が隣に来て耳を引つ張って小声で注意してくる。

「こらー。あんまり覚えてないかも知れないけど呼び捨てじゃなくてちゃんとおじいちゃんと呼びなさい！ それとおじいちゃんが遊びに来たんだから本ももうしまいなさい！」

アイシヤは言われた通り本をしまいにいき、戻ると二ヘラとガープへ笑いかけた。

ガープは本をしまっている間に席に座って、お母さんから出されたお茶を飲みながら何処からか取り出した煎餅を齧っていた。

「おじいちゃん久しぶり…。その…さっきは名前で読んじやったけど、実はおじいちゃんの事はあんまりよく覚えていないんだ。おじいちゃんの顔は本で見て…。ほ…ほら、おじいちゃんって有名な海兵なんですよ？」

「ワシも昔は海で海賊相手に大暴れしとったからのう…。まあ、大昔の大したこともないような話じゃ。そんなことより、ほれ。煎餅くうか？ うまいぞ！」

「あはは…。あ、ありがとう…」

半ば無理やり手渡された煎餅を手に、アイシヤは苦笑いしながら齧り付いた。

すつごく…熱苦しいし…心配が強くて気が休まらない…。

アイシヤにとってガープは、完璧に苦手なタイプの目上の人だった。

★ ☆ ★ ☆

その後ガープはお父さんが店をしめて帰ってくると、アイシヤ達と夕飯を食べて、部下を待たせているからと言って帰っていった。

お父さんは終始不機嫌そうな顔をしていて、アイシヤがグランドラインの話を聞こうとすると、それを止めた。

ガープも仕事のことは余り話そうとはせず、話題はアイシヤの趣味や好きな物などを質問してくる程度だった。

恐らく、何かお父さんはこういった話も嫌っているのだろう。

平穏と堅実を望む人だから…。

まあ、そこはいい。

お父さんは義理の息子なのにそんな態度を取っていて大丈夫なのだろうか。など気になるところはあったものの、一言だけ言わせてほしい。

アイシヤは心の底から叫んだ。

完璧に油断してた！

私の姓はプラネットで、名前は姓が後に来るこの世界では珍しいものでアイシヤ・プラネット。

原作にプラネットなんてキャラはいなかったから、ガープが祖父であるなんて夢にも思わない。

だけど、まさか母方の祖父とはなー。

予想できなかった……。

その後も、ガープはちよくちよくとライムギ村へアイシヤと母の様子を見に来るようになった。

アイシヤはルフィが関わってくるイベントが来るのではないかと身構えていたものの、何も起きることはなく、あまり前と変わらない平穏な日常は2年も続いた。

そう。あの事件が起きるまでは。

3話

アイシヤ8歳のとある日。
アイシヤを妙な胸騒ぎが襲い、彼女は深夜に目を覚ました。

家の外から喧騒と何かが燃えた臭いがする。

なんだ？ なにかがおかしい。

強烈な違和感と嫌な予感。

普段は狭めている見聞色の覇気の範囲を広げると、やはり村の様子は普段と違った。

いつもは寝静まっているこの時間帯に、慌ただしく動く複数の気配。

中には知っている気配も多かったが、知らない気配が多く混ざっている。

聞こえてくるのは悲鳴と噛い。

感じるのは恐怖と怒り。そして明確な悪意だ。

初めて触れる強い負の感情に、アイシヤは思わず耳を塞いだ。

な、なんだこれ…。

と、同時に村の警鐘がカンカンカン！と鳴り始める。

「海賊だー！ 海賊が来たぞー！」

隣の両親の寝室からバタバタと言う音と赤ん坊の鳴き声が聞こえてきた。

両親だ。そして赤ん坊の声は去年生まれたいシヤの妹だった。

バタン！とアイシヤの部屋の扉が力強く開く。

お父さんと妹を抱えたお母さんだ。

二人とも人が変わったように血相を変えている。

「アイシヤ！ 逃げるんだ！ 早くこっちへ来なさい！」

何が起きているのか理解できない。

アイシヤの頭は噛み合わない歯車のように何も導きだせなかった。

アイシヤの見聞色の覇気では、知り合いの女の人を犯され、近所のおじさんが無慈悲に殺されていく様子を感じ取っていた。

そして、それに伴う恐怖の感情も。

「うおえー！」

アイシヤは思わず跪き、嘔吐してしまう。

「何をしているんだー！」

お父さんは嘔吐し続けるアイシヤを構わず抱きかかえると、走り出した。

玄関の扉を開け飛び出すと海とは反対の方向へ走り、それへ妹を抱えたお母さんが追従する。

外は夜だと言うのに真っ赤で、空は黒煙に覆われ月明かりや星は隠れてしまっていた。

そんな中をアイシヤは抱きかかえられながら移動するが、見聞色はその先の危険を捉えていた。

「だ…だめ…」

嘔吐から立ち直れず上手く声が出ない。

お父さんには聞こえなかった。

しばらく進むと、物陰から4人ほどの武装した男達がフラリと待ち構えていたように出てくる。

「おっと…やっぱり逃げるなら海から遠ざかろうとするよな」

「くっ…邪魔するな！」

そのまま強行突破しようとする父。

するとアイシヤの見聞色が自身が地面へ叩きつけられる未来を見た。

そして数秒後、タックルをしようとしたお父さんが海賊の持つ棍棒に殴り飛ばされると、アイシヤは未来予知の通り放り出されて地面へ激突した。

「あぐうっ…」

打ちどころが悪かったらしい。意識がチカチカとする。

痛みに悶絶していると、お母さんの悲鳴が聞こえた。

アイシヤが痛みに顔を歪めながら、そちらへ視線を向けると、母親が一人の海賊に組み伏せられている。

母親の視線の先には首根っこを掴むように宙ぶらりんに海賊に持

たれた妹がいた。

「その子を返してーっ!! やめてえーっ!」

母親が悲鳴をあげるように叫ぶ。

「これがそんなに大事なのか?」

妹を掴む海賊がニヤニヤしながら言った。

まさか…ありえない…。

これは悪夢だ…。

妹の泣き声が遠ざかっていく気がした。

海賊がカトラス刀をシヤカツと抜く。

私は現実を受け入れられない。

「うおーっ!!」

お父さんが頭から血を流しながら立ち上がり、海賊を止めようとするが、他の海賊に組み伏せられる。

「お前は黙って見ていろ」

「やめて! お願いだからあゝ!! お願いします何でもしますくっ!!」

泣き出すお母さんを見下ろしながら、海賊はニヤつきながら言った。

「ああ、これから何でもしてもらおうさ」

シユカツ!

その音はやけにあっさりしていた。

妹の泣き声が聞こえなくなる。

「あああああゝくっ!!! わああああ!!」

お母さんが狂ったように泣き出すが、海賊に頭を引つ叩かれ猿轡をさせられる。

「さて、お楽しみタイムだぜ」

「これすると普通より締めり良いんだよな」

海賊にお母さんが衣服を脱がされていく様子をアイシヤは痛みも忘れ呆然と見ていた。

えっ…なに…?これ…?

夢…? だよね…?

だって昨日まであんなに普通だったのに。

「貴様らーっ!!これが人間のすることかーっ!!」

押さえつけられたお父さんが怒りに吠えるが、顔面を蹴り上げられて黙らされる。

「お前は黙ってそこで見とけ」

呆然とその様子を眺めていると、肥満体型の海賊がノツソノツソと近づいてくる。

「おではこの娘で楽しむ」

「ははっ…相変わらずだな。そんなガキの何が良いんだか」

そこからのアイシャの記憶は断片的だった。

行為の途中で殺された父親。

地面に無造作に捨てられた赤子の死体。

生気を失った母親の瞳。

目を焼き付けるような赤い炎の光。

鼻を刺す黒煙の香り。

アイシャの記憶にあるのはそれだけだった。